

ダニエル書 - 第四十二番

接続リンク

Jeff Pippenger

2024-01-06

洗礼者ヨハネは橋渡し役の預言者だった。

預言者ヨハネは、二つの経綸の間の橋渡しであった。彼は神の代表として、律法と預言者がキリストの経綸といかなる関係にあるかを示すために立った。彼は、後に続くより大いなる光に先立つ、小さき光であった。ヨハネの心は聖霊によって照らされ、彼が自分の民に光を注ぐことができるようにされた。しかし、イエスの教えと模範から発した光ほど、墮落した人間にこれほどまでに明瞭に輝いた光は、かつても、これからのない。影のごとき犠牲のうちに型として示されていたキリストとその使命は、おぼろげにしか理解されていなかった。ヨハネでさえ、救い主によってもたらされる将来の永遠のいのちを完全には理解していなかった。『時代の望み』220。

イエスはまた、架け橋となる預言者でもあった。

キリストは、地から天への道を切り開かれた。キリストは二つの世界をつなぐ架け橋となられる。キリストは神の愛とへりくだりを人にもたらし、またその御功績によって人を引き上げ、神との和解に与らせる。キリストは道であり、真理であり、いのちである。純潔と聖さの道を、一步一步、苦痛を伴い、ゆっくりと、前へ上へと進み続けるのは、骨の折れる務めである。しかしキリストは、神にある生活における前進の一步ごとに、新たな活力と神の力を授けるための十分な備えをしておられる。これは、事務所で働くすべての者が求め、また必ず持たなければならない知識と経験である。そうでなければ、彼らは日々、キリストの大義に汚名を着せることになる。『証言』第3巻、193。

バプテスマのヨハネの預言的な働きには、地上の経綸を天の聖所へと結びつけることが含まれていた。ヨハネが初めてイエスを見たとき、最初に言った言葉は次のとおりでした：

翌日、ヨハネはイエスが自分のところに来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の子羊だ。」ヨハネによる福音書 1:29

しかし、ジョンは古代イスラエルから霊的イスラエルへの移行を指し示すことになっていたにもかかわらず、その移行に対する彼の理解は限られていた。

キリストはヨハネを弁護して言われた。「では、あなたがたは何を見に出て行ったのか。預言者か。そうだ、あなたがたに言う。預言者以上の者である。」ヨハネは将来の出来事を告げる預言者であっただけでなく、約束の子であり、生まれながらに聖霊に満たされ、改革者として、キリストを受け入れるために民を備えるという特別な働きを行うよう神に任命されていた。

預言者ヨハネは、二つの経綸をつなぐ存在であった。

ユダヤ人の宗教は、彼らが神から離れた結果、主として儀式から成り立っていた。ヨハネは、やがて来るより大なる光に先立つ小さな光であった。彼は人々の伝統への信頼を揺さぶり、彼らに自らの罪を思い起こさせ、悔い改めへと導くことになっていた。そうして、キリストの御業を理解して受け入れる備えをさせるためであった。神は靈感によってヨハネに語りかけ、彼に光を与えて、誠実なユダヤ人の心から、幾世代にもわたる誤った教えによって彼らの上に積み重なってきた迷信と暗闇を取り除けるようにされた。

イエスに従い、その奇跡を目撃し、彼の神からの教えに耳を傾け、彼の唇からこぼれた慰めの言葉を聞いた弟子のうち、最も取るに足りない者でさえ、より明るい光が与えられていたゆえに、バプテスマのヨハネよりも大きな特権にあずかっていた。世の光である方を通して過去に与えられ、今も与えられている光以外に、罪深く墮落した人間の知性を照らした、またこれから照らすであろう光はほかにない。キリストとその使命は、影のような犠牲の儀式を通しては、かすかにしか理解されていなかった。ヨハネでさえ、キリストの統治はエルサレムで行われ、彼が現世的な王国を打ち立て、その臣民は聖なる者たちになると考えていた。Review and Herald, 1873年4月8日。

使徒パウロはまた、文字どおりのものが霊的なものへと移行する際の預言の適用を見極める、橋渡しとなる預言者でもあった。彼は、文字どおりのエルサレムはもはや預言におけるエルサレムではなく、預言におけるエルサレムはすでに天のエルサレムへと移行していたのだと理解していた。

このアガルはアラビアのシナイ山であり、今あるエルサレムに対応しており、彼女の子どもとともに奴隷の身にある。しかし、上にあるエルサレムは自由であり、私たちすべての者の母である。ガラテヤ人への手紙 4:25, 26。

私たちがこれまで考察してきたテサロニケ人への第二の手紙2章において、パウロは、文字どおりの異教ローマが、霊的な教皇ローマが権力の座に就くのを538年まで抑えていた力であると指摘している。その章で彼は、神の神殿に座する「罪の人」が、ダニエル書11章36節でダニエルが特定したのと同じ「王」であることを示している。ダニエル書11章の最後の六節における「北の王」が教皇制であるという証拠は、1989年の知識の増大以降、Future for Americaが用いてきた真理の枠組みを確立するための鍵となった。

同じ章で、パウロは、異教ローマが取り去られる時まで教皇権の台頭を抑制していた異教ローマの働きを明らかにし、したがってダニエル書にある“the daily”が異教ローマであることを指摘した。その真理は、1798年に知識の増加を生み出した真理の枠組みを確立するためのまさに鍵となった。

ウィリアム・ミラーの歴史において、フィラデルフィアの運動からラオデキアの運動への移行が行われようとしていたとき、そのメッセージが宣べ伝えられた。フューチャー・フォー・アメリカの歴史においては、ラオデキアの運動からフィラデルフィアの運動への移行が今まさに進行している。

テサロニケ人への第二の手紙でパウロが提示し、歴史上の異教ローマから霊的な教皇ローマへの移行を明らかにしたその真理は、ウィリアム・ミラーの預言理解の枠組みとなった。バプテスマのヨハネとパウロはともに、文字どおりのものから霊的なものへの移行

を説明するために立てられた。ウィリアム・ミラーはバプテスマのヨハネの型で表される人物であり、その働きにおいては、異教ローマと教皇ローマの関係と移行、すなわちヨハネが明らかにするために立てられたその移行を認識することが不可欠であった。

ダニエル書には「the daily」への言及が五回あり、いずれも教皇権の象徴に先行している。私たちが考察している預言的な移行の文脈においては、その五つの言及はすべて、文字通りのローマから霊的なローマへの移行を含んでいる。ダニエル書における「the daily」は、ハバククの二つの表に表された真理の一つであり、ゆえに擁護されるべき基礎的な真理である。そしてそれは、やがて偽物の宝石や貨幣によって覆い隠されてしまうことになる真理でもあった。二つの神聖な図表に表されたすべての真理が、エレン・ホワイトの著作の中で靈感による直接の裏づけを得ているのは偶然ではない。（「the daily」を含む）いかなる基礎的な真理をも退けることは、同時に「預言の霊」の権威を退けることである。

それから私は、『Daily』に関して、『sacrifice』という語は人間の知恵によって補われたものであり、本文に属するものではないこと、そして主はその正しい見解を「裁きの時の叫び」を上げた者たちにお与えになったことを見た。1844年以前、一致があった時には、ほとんどの者が『Daily』についての正しい見解で一致していたが、1844年以後は混乱の中で他の見解が受け入れられ、闇と混乱が後に続いた。Review and Herald、1850年11月1日。

『審判の時の叫び』を告げた者たちは、「the daily」を異教、および／または異教ローマの象徴として理解していた。彼らの理解には、ダニエル書のその箇所に「sacrifice」という語は本来属しておらず、欽定訳聖書の翻訳者たち（人間の知恵によって）によって付け加えられていたのだという事実の理解も含まれていた。先駆者たちの理解にはさらに、「the daily」は常に教皇権の二つの象徴のうち一つと関連づけて提示され、しかも異教（「the daily」）は常にその教皇の象徴に先行する、という点も含まれていた。それらは、預言史に登場した順序で常に識別されていた。ダニエル書と黙示録は、異教が教皇主義に先行するという歴史的順序から決して外れない。そして黙示録が第三の荒廃させる勢力である偽預言者を登場させるときにも、その順序は常に守られている。

パウロの、預言における文字どおりの事柄が十字架の時代に霊的なものへと移行したという教えがなければ、（ヨハネを除く）すべての福音書に記されているキリストのエルサレム滅亡の予告との間にジレンマが生じる。ダニエル書において「the daily」と結び付けられている教皇権の二つの象徴は、「荒らす憎むべきもの」と「荒廃の背き」である。これら二つの象徴は、獣の刻印（憎むべきもの）と獣の像（背き）を表している。

教皇権が自ら異端と見なす者を殺害することを可能にする背きは、教会がその関係を支配する形での政教一致である。したがって、ダニエルは、教皇権の獣の像である政教一致を「荒廃をもたらす背き」として表している。聖書は偶像礼拝を憎むべきものと定めており、教皇権のあらゆる偶像礼拝は、その偶像の安息日より象徴されている。これをヨハネは「獣の印」と呼び、ダニエルは「荒廃をもたらす憎むべきもの」と呼ぶ。

そのうちの一つから小さな角が生え出て、南へ、東へ、そして麗しい地へ向かって、非常に大きくなった。それは天の軍勢にまで及ぶほどに大きくなり、軍勢の一部と星

々を地に投げ落として、それらを踏みにじった。さらに彼は軍勢の君にまで自らを高ぶらせ、彼によって日ごとの献げ物は取り去られ、その聖所の場所は投げ落とされた。背きのゆえに、日ごとの献げ物に敵対する軍勢が彼に与えられ、彼は真理を地に投げ落とし、事を行って成功した。ダニエル書 8:9-12

これらの節については別の記事でより詳しく扱いますが、11節では、キリストに敵対して自らを高めたその力は異教ローマでした。彼らは彼の誕生のときに彼を殺そうとし、そして最終的には十字架でそれを成し遂げました。その節は、「彼によって」（異教ローマ）「the daily は取り去られた」と述べています。「取り去られた」と訳されているヘブライ語は「rum」で、「高く上げて高める」という意味です。異教ローマは異教の宗教を掲げて高め、実際、歴史においてまさにそれを行いました。だからこそ彼らは「異教」ローマと呼ばれるのです。

次の節は、教皇ローマには「軍勢」（軍事力）が与えられ、それが「the daily」（異教）に対抗し、あるいはそれを打ち破るものであったことを示している。これもまた歴史的事実である。というのも、教皇権は（彼女自身の軍隊を持ったことはないが）軍事力を用いて、自らの権力伸長に課されていた抑制を打ち破ったからである。その力は異教ローマに由来した。彼女が用いたその軍事力は「背き」を通して彼女に与えられた。というのは、538年に彼女を玉座に就かせた諸王の軍隊を彼女が掌握できるようにしたその背きとは、教会と国家の結合という背きであったからである。まず第十一節では異教ローマが取り上げられ、異教ローマがキリストに敵対して立ち上がり、異教の宗教を高めるだろうことが、学ぶ者に告げられている。

次の節は、教会と国家の結合という背きが、教皇権に対して異教ローマが加えていた抑制を克服して取り除くことを可能にしたことを描写している。歴史は、その両方の節の適用を支持している。「the daily」は、キリストに敵対した権力としての異教ローマ、または異教ローマによって高められた異教の宗教のいずれかを表している。「the daily」の象徴の後には教皇権が続く。というのも、それは政教一致という背きを指し示しており、まさにそれが教皇権に軍隊を与えて汚れ仕事を行わせる力となるからである。ダニエルによる「the daily」の三度目の用例は、答えを生み出す問いであり、それこそがアドベンチズムの中心的な柱である。

そのとき、私は一人の聖なる者が語るのを聞いた。すると、別の聖なる者が、語っていたあの聖なる者に言った。「日ごとのささげ物に関する幻と、荒廃をもたらす背きは、聖所と軍勢の双方が踏みにじられることになるまで、いつまで続くのですか。」
ダニエル書 8:13.

この節では、「その幻はどれほどの期間か」という問いが発せられており、したがって求められているのは時点ではなく、期間を表す答えである。問われているのは、幻がいつ成就するのかという特定の日時ではなく、その幻の期間がどれくらいかである。この節は「いつか？」ではなく、「どれくらいの間か？」を問うている。その幻は、“the daily”として表される異教の荒廃させる力と、地の王たちと姦淫することによって成し遂げられる教皇制の背きによって表される教皇主義に関するものである。異教とそれに続く教皇主義という二つの荒廃させる力は、「seven times」という期間、聖所と軍勢を踏みにじることになっていた。

バビロンの時代に始まり、紀元70年に異教ローマがエルサレムを破壊するまで続いた、文字通りの聖所の踏みにじりは、歴史の始まりから終わりに至るまで異教の勢力によって行われたことを認識することが重要である。したがって、文字通りの聖所と文字通りの軍勢（神の民）を踏みにじったのは、複数の異教勢力であった。しかし、霊的なエルサレムと霊的なイスラエルを踏みにじったのは、霊的なローマであった。

しかし、神殿の外の庭は除外し、測ってはならない。そこは異邦人に与えられているからである。彼らは四十二か月のあいだ聖なる都を踏みにじるであろう。また、わたしはわたしの二人の証人に権威を与える。彼らは荒布をまとって千二百六十日のあいだ預言するであろう。ヨハネの黙示録 11:2, 3.

バプテスマのヨハネは、自らの務めの全容を知らないまま、地上の聖所から天の聖所への経綸の転換を指し示した、橋渡しの預言者であった。パウロもまた、文字どおりのイスラエル（軍勢）から霊的イスラエルへの経綸の転換を指し示した、橋渡しの預言者であった。四十二か月の間踏みにじられたエルサレムは、霊的なエルサレムであった。

ここで言及されている期間——「四十二か月」および「千二百六十日」——は同じであり、いずれもキリストの教会がローマから圧迫を受ける時期を表している。教皇至上権の1260年間は西暦538年に始まり、したがって1798年に終わることになる。その時、フランス軍がローマに進軍して教皇を捕らえ、彼は流刑先で死去した。その後まもなく新しい教皇が選出されたが、教皇制度はそれ以前に有していた権力を二度と振るうことができなかった。『大いなる論争』266.

パウロは、十字架の歴史の中で起こった転換に際して、「上にある」霊的エルサレムが神が御名を置くために選ばれた都となり、地上のエルサレムは聖書の預言におけるエルサレムではなくなったことを示した。

このアガルはアラビアのシナイ山であり、今あるエルサレムに対応しており、彼女の子らとともに奴隷の身にある。しかし、上にあるエルサレムは自由であり、私たちすべての者の母である。ガラテヤ人への手紙 4:25, 26.

この真理を正しく理解することは不可欠であり、聖書の預言における象徴として文字どおりのエルサレムを用いるという誤った適用は、ローマの教皇が反キリストであるという真理をくつがえすためにイエズス会が作り出した欺きの一部である。その偽りの教えは、背教的プロテスタントの間に、預言の象徴として現代のユダヤ国家イスラエルに誤って目を向けさせる信念を生み出している。文字どおりのエルサレムは、十字架の時に神のエルサレムではなくなった。

エルサレムの都はもはや聖地ではない。キリストを拒み、十字架につけたゆえに、神の呪いがある。その上には罪責の暗い汚点がとどまっており、天からの清めの火によって清められるまでは、二度と聖地とはならない。この罪に呪われた地があらゆる罪のしみから清められる時、キリストは再びオリーブ山に立たれる。その御足がそこに置かれると、それは二つに裂け、神の都のために備えられた大いなる平原となる。レビュー・アンド・ヘラルド、1901年7月30日。

世の終わりに関するキリストの預言を考察するにあたり、文字通りのエルサレムと霊的なエルサレムの区別の意義が取り上げられる。ダニエルが「the daily」に言及している四度目は、第十一章である。

彼の側に軍勢が立ち、彼らは力の聖所を汚し、日ごとのいけにえを取り去り、荒廃をもたらす忌むべきものを据える。ダニエル書 11:31.

この節は、西暦538年に異教ローマが教皇権を地上の王座に据えた働きを指し示している。「腕」とは、496年のフランク王クローヴィスに始まって教皇権のために立ち上がった異教ローマの軍事力を表す。クローヴィスに続き、さまざまな欧州の王たちが教皇権の確立のために尽力したが、この節が指し示しているのは、彼らがツロの淫婦と結託して政教同盟を結ぶという背きを犯したのちに、欧州の王たち（「腕」）が教皇権のために行った四つの事柄である。

彼らが教皇権のために立ち上がると、異教ローマと教皇ローマ双方の力の象徴であったローマの都を「汚し」あるいは破壊した。ローマの都が絶え間ない軍事攻撃にさらされたため、その節にある「汚すこと」は年月を通じて繰り返し行われた。それらのヨーロッパの王たち（「腕」）は、「日ごとのもの」をも「取り去る」ことになる。この節で「取り去る」と訳されているヘブライ語は、第8章にあったように「rum」ではない。この節では「取り去る」と訳されている語は「sur」であり、それは除去することを意味する。西暦508年に、ヨーロッパの王たち（「腕」）は、教皇権の台頭に対する異教の抵抗を取り除くことになる。さらに538年には、その腕が教皇権を地上の王座に据えることになる。そしてまさにその年、オルレアンの評議会で、教皇権は日曜法を制定した。

礼拝の日としての日曜日は、ホワイト姉妹が「偶像」の安息日と呼ぶものであり、偶像崇拜こそ「忌むべきもの」という語の聖書的定義そのものである。538年に、異教ローマの軍勢が荒廃をもたらす忌むべきものを立てた。

「神が祝福しておられない日である偶像の安息日を高く掲げ礼拝する者は皆、神から授かった能力を誤った用い方へと歪め、その全力をもって悪魔とその使いたちを助けている。識別力をくらませる別の霊に感化されて、彼らには、日曜日を高く掲げることがまったくカトリック教会の制定にほかならないことが見えない。」『Selected Messages』第3巻、423頁。

預言と歴史は、三十一節について私たちが今しがた示した解釈を裏づけている。私たちが預言がこの解釈を裏づけると言うのは、同じ事実を扱う別の預言がほかにもあるという事実を指しており、ただし今はそれらを議論に持ち込まないということである。ダニエルが「the daily」を用いている五回目にして最後の箇所は、十二章にある。

日ごとのいけにえが取り除かれ、荒廃をもたらす忌むべきものが据えられる時から、千二百九十日がある。待ち続け、千三百三十五日に至る者は幸いである。ダニエル書 12:11, 12.

予言と歴史は、508年に、ダニエル書7章が示すように三つの地理的障害の最後のもの（ゴート族）が根こそぎにされたとき、教皇権の台頭への抵抗が実質的に終わったことを裏づけている。

私はその角に目を向けていたが、見よ、それらの間から別の小さな角が一本生えてきた。その前に、もとの角のうち三本が根こそぎに引き抜かれた。さらに見よ、その角には人の目のような目があり、大いなることを語る口があった。ダニエル書 7:8

三本の角が取り除かれていく様子は、二つの聖なる図表に示されており、その三つの地理的障害のうち第三のものが508年にローマの都から追い払われたとき、教皇権の台頭に対する抵抗は取り除かれた。第十一節で言及されている設置は、508年から538年までの三十年間を表している。それは、神の神殿に罪の人を据えるための準備が成し遂げられた三十年を指し示している。

「取り去られた」と訳される語は「sur」でもあり、「取り除く」を意味する。そして508年には、教皇権の台頭に対する抵抗が取り除かれた（取り去られた）。その日付から1290年を経ると1798年、すなわち教皇権の致命的な傷に至る。1335日を経ると、最初の失望と、1843年の年の終わりのまさにその時点における遅延の時期の始まりに至る。その聖句は、1843年に至る者に祝福を約束している。「cometh」という語は「触れる」を意味する。1844年の最初の日は最初の失望を画するが、1843年の最後の日には1844年の最初の瞬間に触れている。一年の最後の日は、その翌年の最初の日に触れる。その日付に結びつけられた祝福は、歴史と預言によって支持されている。

「the daily」が基礎的な真理であることの意義についての考察を、次の記事で続けます。

1840年から1844年に与えられたすべてのメッセージは、今こそ力をもって示されるべきである。多くの人々が方向を見失っているからである。これらのメッセージは、すべての教会に届けられなければならない。

キリストは言われた。「あなたがたの目は見えているので幸いです。また、あなたがたの耳は聞いているので幸いです。まことにあなたがたに言います。多くの預言者や義人たちは、あなたがたが見ていることを見たいと願いながら、見ることができず、あなたがたが聞いていることを聞きたいと願いながら、聞くことができませんでした」[マタイ 13:16, 17]。1843年と1844年に見られた事柄を見た目は幸いです。

「そのメッセージは与えられた。そして、時のしるしが成就しつつあるゆえに、そのメッセージを繰り返して伝えることに遅れがあってはならない。終結の働きは成し遂げられなければならない。大いなる働きが短期間に行われるであろう。まもなく、神の定めにより、大いなる叫びへと膨れ上がるメッセージが与えられるであろう。そのとき、ダニエルは自分の分を立て、証しをするであろう。」原稿公刊集 第21巻 437頁。